紫紀行

三

ル呂4
344
3

呂ル門
344
3

筑紫紀行 巻三

四月十一日 卯刻より宮島を出帆す 風ふく一里程走りて小方
くばかの長岡大嶽をぞ云ふなりよいなる行きも人家百計ばかりなり 山を安
芸周防の境なり かくて防州乃津く走りぞくなどいふなり
を通る 山南の方ハ沖乃かむろ 北のかむろあり かゝる程より風あ
よろしくて 負(おひ)つゝとて穴の口(宮島より七十二里)の川口ふ着く 乗(のり)ゝ
又合せ走るよ午刻ゝゝゝゝあれりとて出(いで)ぬと出(いで)来風(きて)
追(おひ)て風よハいまゝど風ゆゝく波ゝく 船揺(ゆり)て乗心安(のりごゝろ)うらけまバ
かゝて六七里走りて神代(かみよ)ふ着(つく)る 卯(う)刻居る時とぞ出(いで)ぬ 出(いで)ぬ
かゝて六七里走りて神代(かみよ)ふ着(つく)る 卯(う)刻居る時とぞ出(いで)ぬ 出(いで)ぬ

南より入るとも小家なくより入るとて一里計りゆく大島乃
瀬戸より入るに瀬戸と乃間ゆより大島の里人家二三百軒頗賑ひ
しく入るに南ゆ小松より塩演入るとたり人家百餘軒ありべし
演をゆハおひてしく鰯を干たり鰯網の者も住て多くとりて
干鰯を作り出すあり今秋ハけ演より舟を繋て泊す
○十二日卯刻より舟出す今日も東風甚く負よく波おだやかあり
一里程をりて沖の方よりむろ乃ゆ又よりひ浦とて大なるとふきさ
二乃浦あり小ゆ樹木もなく岩のみ連て小の方よせんとが嶽
ありけ嶽のさきゆ出る鼻を廻りて上の関乃ゆはいる南よりたりて
西ぐと浦乃ゆ九ゆ辰刻ゆ防州と乃関ゆ五里より舟を入る湊よし
入ゆハ瀬戸より狭隘なり焼筑者舟番ゆなどあり町屋八百軒餘
後をゆ山く一筋より立たりけたり両屋多く又遊女屋もあり此地ハ
離れたるあり二丁程向より立津とゆ入るゆ見ハ地方甚く浦ゆ
ぜ人家のみぜ其外大形上の関より同しくて舟うとりて楼屋
とゆ舟宿ゆりく酒とのむ鯛乃さしみ鯛のちりみ又鯛の塩煮
たぜとなりく飲る酒肴乃代三百文あり其外甚く風景ゆ
入りて舟より陸へ上りて午刻より舟を出すとて出るに此方ゆ
ゆぐいゆくとゆ入るとて出る未刻ハ室積と乃関ゆ七里ゆ舟と着く泊
宿せ入海の湊ゆく其相体ゆ人家二百計両屋遊女屋ゆぜも
ありけれまで賑にしてゆぜ町家も茅葺ゆ家多く所の西なる演を

よ峨眉山普賢寺として普賢菩薩を安置せる寺なり日本にたゞ一体の石なるゆゑ世人石碑あり世空八幡の麓の書写山に開基の上人あり かつて山を通ると落ちたる女ありし時よ普賢菩薩遊女に形を化して上人を試みたまふと人の尊徳感応ふかくまして心弱き法ばかりしかば天時に本相ふ現ず法を説き人をして摸像をなすべき寺乃縁起ふけいる今日年刻ふけ湊ふ唐船来り美女美沢紀の国の沖を漂泊したる彼ふの商船なりといへり紀州長州乃二侯より出船なる警護の番船世に数十艘乃引船ふ早船等附添ひ日夜ひたすらに焼筋数多く炊かせたる厳重なる仏ふかりかるに時よ

来合せる孫寿の壮観をまのあたりめづらしく覚ゆ扨もうつ下の関と海上三十五里ふ八幡ふ後の國遥ふまつして海廣く波高く近き浜ふ出ふる人ふ行る勝地なりしたく恐しき大瀧なりと聞ふ及ばずふ山ふ上陸きびしく見ひ定めて國元及大坂ふ書ふて出しまでき書状と徳或ハ大坂及きふ又ハ彼ふまで出しまでき之用意ふ穴の物せふで一くさ調べ法めて帰る陸行の用意をしく扨歩よ入まバ船の名称を今書と限りて書ハ海をと調へて船人と労賞し舟こぞりて打のミて石孫乃宴とぞ云ふ抑播磨の宝乃津より山方伯後の輔安藤乃官ふなぞふて海津ふ遊ぶ武ハ逆旅ふて飲宴し藝子舞妓あゞて戯き遊びたりしるべて

周防國室積湊唐船護送之圖

浮薄たる奢侈の心よりすれバ。此舟路の情状ハ漫々たる滄海に
漂ひて風波の難を恐れ。我ハ物事ごとき鴎の洲先に碇おろして。
波のまにまに終夜耳にうち聞て。身ハゆられて安寝の隙なく辛
うじてよき湊に着けるる時ハ偏へに蘇生の思ひをなし。又陸に
のぼりて似るがまゝバ痛定りて痛を思ふとやらん。其悦びの餘りに
積欝を散じ。神氣をも養ひなんとするにありし。是より
陸行したらんにハ又今と思ひの安からしよハ引替て長途の艱難の
程も思ひやられてわびしく。いづれにも捨りそげに気やす
からぬ物にはありけれ。諺に云ふハ可愛子にハ旅をさせよとや。人稼
に誰も旅をもうるぬ我ならず父母の業を達ずしてたまはれバ已

云ひしさふたゝびもして悔しく思ひやるゝ事もなき物とぞ申して不
得已窮人の旅中此情いかばかりにかあるべき。誠に第一の其の情を
も思ひやり。身の修行にもなるべき業なりとかたりて。慨嘆をなして
徒人にも語り合て気を散じ。酔にいでて臥しぬ。
○十三日。夜明れば貝を吹き。太鼓打鳴らす音の聞ゆるに。起出て見
れば。彼唐舟を護送する。紀州の兵船の内なり。吹貫など立て。数
多の番船打囲みて。唐船をば引船にかけて。引出す。珍しき見物
なりけれ。辰刻ばかり此浦より上陸して。船人に別る。船人共ハ渚岸迄
よそり出て拝伏して。此程の恩顧の程を謝しなど悲みて。互に
と遊ひて。やゝ迷ひけるを。各々の名残しけれ方よりも懇に

労謝して別れて室積乃小町よりぞ町はともし十町計り行て町を
はなれて松の並木乃たてる間をゆく。砂地をゆくこと一里ばかり。西
ハ海、東ハ山なり。山の麓より浪打際まで八三四丁ならんとおもふべし。
ゆきて光井、野原などいふ村々をすぎて嶋田の驛 室積より是まで一里 に至る。茅屋
勝手な百軒計りあり。此驛の出口に大なる川あり。嶋田川といふ。室積
よりこゝまでの道に並立る松は木振よく茂りて行かふ旅人をおほふ。彼
海山の透て見ゆるなども、すぐれて佳境妙景にて、舞子の濱にもよく似
たり。假橋にて嶋田川を渡る。川向ハ浅江村。村を出離るれバ又松原
ありて、枝下を塩風にふかれて、いと面白き老松ども多く茂げあひて、
風景いふべくもあらず。かくて五丁許ありて山の尾よりして濱辺にいづ。大なる

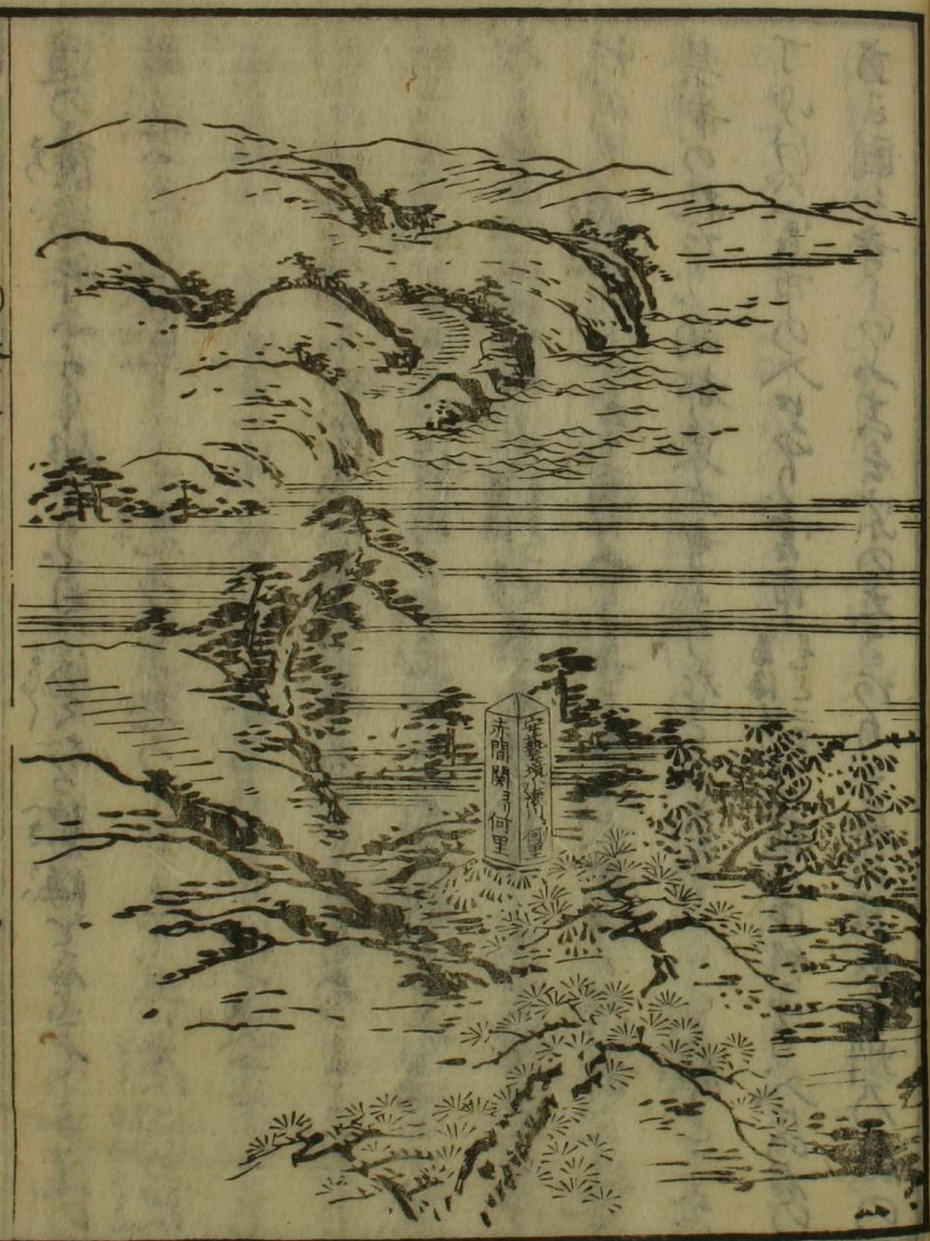
小さき松の見ゆるある岩ぞ絶ずして、行人の目を悦ばしむ。魚が縁村
をすぎて、又松乃縁にいづる。嶋田より是まで二里 一里餘の入海乃あるなり。その入口
より二丁許りさきに、ゆるやかに塩濱あり。是よりの塩濱ハ舟出て、よそ
にのぞみ見ゆる。しかれハ珠しくて、よく見ゆるに、先渚の方に塩焼る
家三四十見え、大なるより濱手へ向て土手を築て、數百丈計の地を平ら
に概して、ぞきに砂をこそ撒し、さて潮くみして、そこに汐を汲
かけて日に干もし、是ハ皆女の業なり。かくてその砂をかき寄せて大
なる箱つくりの桶なる中に入て、そこに又汐を汲かけて灰汁をたらし、桶
して垂るるを塩釜に汲入てたくなりとぞ。此邊の町屋二筋あり。
本町といふをはじめて見るに、藏造の瓦葺乃家多し。町の中程に川

ばかり石橋を掛たり。橋を渡りそこも町の様ハかなくこれすべて問屋商屋
多く。町今ガーふく巷あんともるもよ。又小川あり。けい川と唱ふ。
是より八徳山乃領川より西の方ハ萩ばかり。宝積寺より此方を八白寺
を多く出すゆなり。かくて町を離れ。十町程行ばせいの川といふ
川あり。裾を攝て歩渡る。此乃方ふくーが渡を見つく行く。一里
程ふーさく又小川のりるを歩渡ば。久米村あり。一里餘人家四五
十軒皆茅屋ふく。間の宿ハ問屋めさたる家を見えず。けい和
より渡を通る。松の並木の間より眺望の景色いとんさふく成も
廣く行よ。ちく遠石（久米より是より重）とて小ふる。人家百計あるふけ和も
間の宿ふもこバ茶屋ハふく。されどる次ハ行るあり。けい和よりる八幡宮ハ宇

佐の八幡宮乃新宮ーなびーふく。日本國中より社の八幡乃其一乃
とぞ。ちるふりて町中ふ新宮石とつ石ばり。此事ハあよ考もーく。
何ハをなく行るさりーを。徳山乃旅宿のまの物語とよ。後ふ多つる
ふり。四社の八幡ハ豊前の宇佐。山城乃男山。相模の鶴が岡とけ周
防の遠石とをいふ。ありこそ。かくて申刻に徳山（遠石より是より半里）より著く。重岡
屋今助とつて人の家ハ宿ふけ。毛利大和守殿の居城下乃。町乃
数十軒ふ計。町ハ長ーく。人家ハ瓦茅葺打雑ふく。まつの商屋一と
して翻たるもふく。人えく。宿屋も多くえ人ゆれども。折ふ旅人乃
往還をすふくしてちぞーくえ人ゆ。
○十四日。卯刻ふ立。是松の間を乃。平乃ふく道ふ。二十丁計

行あべ川清村より至る村さづきふ川清川あり石橋を渡りバ乃の西
より西る濱辺の方ふ人家百軒計り有古市村より佐渡の小湊ふりとぞ
又行く富田村より至る四丁計り行く富田の新町より至る徳山より是
一里十三丁
雑まて人家百軒計り行きもゞし富田の新町ハ漁者ゆく業屋家ハ多し
是より行く八海岸ふそひて少しくるくしく豊後の國を西南より
東ふ見つゝ切ちひちさ坂を一ッ越て福川町ふいたる富田新町より是
是ハ廿五丁是
ハ前の雑まりハまさりて人家を三百軒計家屋をかれど休むべき茶
屋ハあらぬ是より矢地川乃橋を通り行四丁ふ行く矢地村ふ
至る人家四十軒例の業屋ふ西乃宿ふりとゝ見かくてふ
ちさ山を一ッ越て戸田村ふ至る福川より是と一里人家百軒計徳山の西ふ
ひ

ひ西ふ八業屋ふり孫ゝ者ハ清潔ふ擇を立入て蕎麦切を云
酒をのゝたり是より右左山の中を行ふ坂を登りて峠ふ
たををとりふ西ふて人家十軒計り有り此辺境ふて石を立て志せり
従是東都濃郡
従是西佐波郡
つきとり其ハ石を立て上り下りの里数を記せり委しくハ次
精山の
ちる圖のゆしかくて坂を下りて又海を沿ふ出るを行て富海ふ至る富田より
是ゝ
二里半入海の濱を沿ふて人家百六十軒あり大形漁者ふり居まで
雑まて家屋もかれど是より三丁計の程ハ磯をぢくひ乃道ふて
砂濱く是を埋て家ハ雑ゝて山路ふて右ハ岩山ふ雑ゝく
屏風を立てるゆく左ハ海岸水を去る数ふして其ハ東海



周防国
佐波郡
冨海村

境内海岸之風景

道の麓堆沛ふ〻く似くり。南ハ湯〻たる碧海を臨ぐて巷後の
國遥ふ見え。懍慄として危ふく恐ろしき迄ど。且ハ廣闊の觀
望ハ胸中を陶寫せしく暫休て谷間ふ下り行て又十四五丁也
ふて浮野峠ていを除し坂のどやふ〻くるもあ〻うらぶ下り
坂ふハ殊ハ險さを二丁計あ且きふとて又漸下りて海辺の平
地ハ出まバ浮野村として富海より是と一里茶屋ハり。暫〻是を休めて三十丁
計行て國衙村ハ到る。國ちやう寺とて大寺ハり。門前ハ殺生
禁制の札ハり。南都東大寺ハりたくうるふりこと離まて又
丁ゆけバ宮市の入口ハり。宮市富海より是と二里は萩乃城ハり。入口の右の
方ハ國分寺とて大寺ハり。其寺の大さハり。凡百石長州乃殿の

清祈願ふ為ハり。此宮市より三四丁（十丁。中の関）一里餘ハり。
かくて入行まふ町ハ賑ハしく繁昌の地ハり。表町裏町
千軒ハ有りとぞいへり。周防長門乃両國ハ通用乃張札ハり。
ハり十ヶ所とのの札ハり。此きまべく張ぬ所八十ヶ所ハるちて町
中に天満宮乃社ハり。いとかうし。宿屋ハり。昨日のこ刻
ゆより雨ふり出て。今日も終日ふりけまバ殊ハ行ぬこゝ難ふて日
ゆまぐるゆれども花とうんとして。茂樹屋孫七とて者の家ハ宿も
あの門際〻〻まのハり〻〻しらひも殊ハ恭〻して。茶ッ菓ハ
あ〻きれバ出ぬもやもやもまるんぬ也す。
○十五日辰刻ハふ立出。三十丁ばかり行て。長谷まちよとふハり。

こゝとるとくちど川を渡て渡ふ川向ゟ佐野村あり。是より山路を
六七丁登るバ佐野ゟ葛尾。是ゟ西ハ佐野郡。是より西ハ佐野城郡。例の
石ゟ彫て建たり。坂を下り暫く岩渕村ゟ入る。農家二三十軒
路傍ゟ入ゟ茶屋もあり。又六丁ゟ壹戸市村
ゟ入る。農家四五十軒。是ゟハ茶屋なり。暫く休む。此ゟ佐野
坂なる。是ゟ南の方ゟ大なる溜池ゟ入ゟ。又一里程行て市村ゟ
出る。例の御邑ゟ。是ゟ茶屋もあり。是より山路ゟ加り一里餘行
ゟバ新川ゟ入る。川を渡るバ新町。宮市より是ゟ四里半。雨ゟ降ふやまぬ
仍路艱難。ゟバ宿を早く宿ゟを求めて。福田屋清兵衛ゟ入り
宿る。しかも萩の庄ゟ入る。川の津なり。人家四五百軒ゟ。茅屋多し。

○十六日朝雨ゟ降出る。二十丁程行ゟバ村。農家四十軒
計。又行ゟバ新川市村。人家百軒計。ゟ茶屋ハ多し。此村ゟ閉門し
たる家なり。ゟ戸ゟ紙を張り。ゟ半紙一枚ゟ閉戸と
大字ゟ書く。情ふかく　赤川市村庄屋市三郎存内　畦百姓
元家　右ゟ者ゟ持ゟ不宜ゟ故酒礼ゟ渡ゟ
越粗ゟ依ゟ先閉戸ゟ付ゟ
と記せり。國元ゟ者ゟハ同ゟ様ゟ。ゟ者ゟ。ゟ者ゟ。ゟ者ゟ
る根村ゟ入る。茶屋ゟ一軒ゟ。是ゟ寄て。ぬきてゟ神ゟ打拂
ひゟ。ゟ者ゟ。ゟ者ゟ。ゟ者ゟ。ゟ者ゟ。ゟ者ゟ。ゟ者ゟ
里ゟ。ゟ者ゟ。ゟ者ゟ。ゟ者ゟ。ゟ者ゟ。ゟ者ゟ。ゟ者ゟ

ある〜なり。東周防國吉城郡西長門國厚狹郡 小郡より山をこまやでもまぐで石地ゆく所
ものすごく。剩雨天の泥濘ゆく。艸鞋を穿ち人てゆ石ハ足を斷。或ハ
足と艸鞋との間ゆ挾まりゆぐ〜して。辛苦いつべくぐ。見より所々
ゆく宇里計り行ば長つの山中乃宿ありて。小郡より三里人家三十軒計り
住茅葺の農家のみゆて。宿屋ばかりでもいとも〜まさゆげなるふき
家のみなり。山ゆも萩の花ばかり。山ゆを離きて又たりて下る中
より。人家五十軒計り。ちさき多決川といふ川のち橋を渡る。
ふるまゆ村をすぐ。下山中も山ゆも例の茶屋ゆ。二股川ゆまく
渡る。川向ハ本四村。人家三百十軒計りまぐゆまくたてり。又ちさき
うの村ありて。人家二十軒計。茶屋二三軒ばかり。山ゆを登体して殆

ある山坂と一ッ越て吉又村よりある例の茶屋をあり。山ばかりより海
きものゆよりゆるゆハ。皆山路ありとゆふ。て。谷合の所を下りて。山坂
と越ゆきバ舟木の町ありて。山中より海きまでゆく人家三百軒あり。
茶屋宿屋商屋まぐ〜多き中ゆ。木綿を專ゆ織ふ多く。山地の
名産ありとぞ。又石灰を焼ゆ。其臭氣風ゆ誘ゆまく道路まで
ぐさり。壞うさ紀ゆ。額を感。鼻を掩うて通ゆ。今ゆも面歌ぐ
して。風ゆ人烈〜ゆれバ。ゆ。進ゆ。ぐ〜して。日もくるゆ。ゆれども山ゆ
宿り求めて。肥後屋幸七ゆ。ゆ。宿る。家大ゆ。ぐ〜して。座席も
狹ゆまぐ。第潔く。疎ゆ。ぐ〜。主乃人よきゆ。をバゆ。清ゆ者と
居ゆまゆ。山ゆ。ゆ。宿まゆ。山三日以来ハ風雨のゆ。旅衣も

長門国
赤木里
肥後屋
幸左衛門
ゲ家の図

一入ぬきまさりたる路も殊に艱険にて覚え侍り。囲り驛路にハ行まで
宿馬鈍ければかゝる急ぎ辺土にさへハ心をつくし請まゝなるも出さゞりしてハまた
任せぬもののゆゑなりき。宿のものして、あるじのいと慇懃なるに少し身を休まり
て饒舌なる餘りにあるじを呼出してむかし語りなる何くれや、あるハ
和名萩の浦館地にて、萩の浦家に熊谷といふ家とやいへる人まじれ
たる碁の達人にて、近辺にならびなくかれ。又此所を飛木とやいはれ、昔
神功皇后三韓を伐ちに立せ給ふ時、御舟の木を此所より伐出せ
しよりての名なりとかや。まことらしく語るほどに眠気ざしければ
また辞して寝ぬ。
○十七日。辰刻西歌空晴たれば立出ぬ。町の出口より川あり。板橋を渡

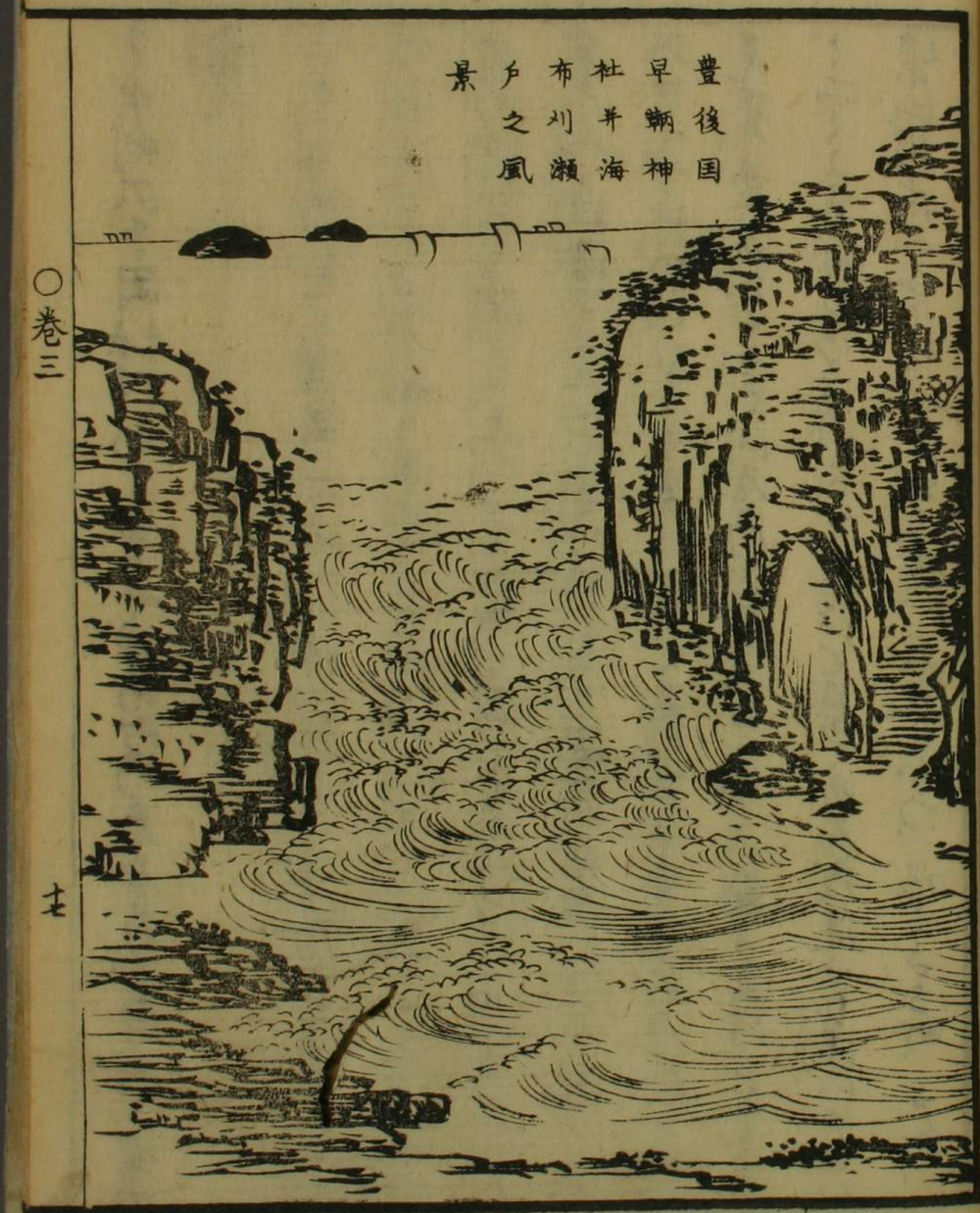
せり。それよりまた木村といふ所を経て膝坂あり。赤石より小石離れる泥塗
なるところいとあしく、三十丁計行て又坂にあり。人家二十軒計、茶屋あり。
坂を越て十五六丁にて厚狭の市に至る。赤木より一里八丁。通り筋に横町
ありて人家百四五十軒、多くハ茅屋にて、旅籠の家も二三十軒ばかり。
茶屋宿屋なれど、いとくまずしき家なりければあやしき農家の年貢ハ
成るべく定免なり。上田ハ壱石代、下田ハ壱石代、畠ハ壱反に半代なり
壱石五斗代にて、運納ハ壱反に殊ハ百文計なりとぞ。路の間は
たるまでに書入ぞ。又海に近う宿なりけるは、ぶやかに二里
八丁行て船に乗る。人ハ下の関へ海上五里なく安らかに渡る
山あり。日より風の便もよくはへ行くべきにもあらず。けふの

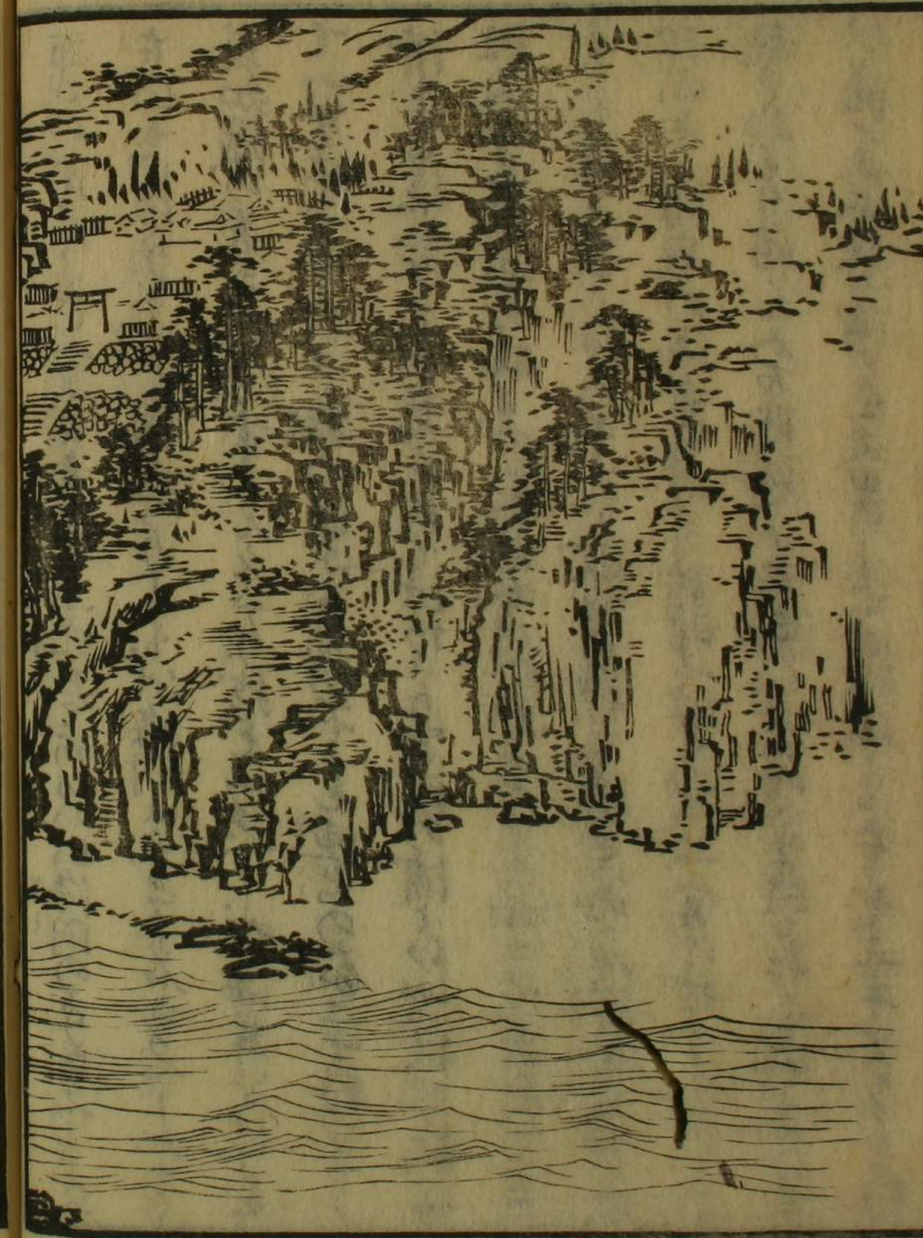
宝形に元あくしばとて立(たぢち)よりゆけば麻の出そぎまより川なり。舟渡く
りまる。十丁計行て廣瀬村よりまる。農家三十形計あり。次よりて大留
村。是も農家二十形許(ばかり)あり。是より五丁許なる縄手乃平地なり。
中程ふなりてさしの西水の落さるふや行人乃膝(ひざ)を越る計り乃を埋し
たるふあり。辛うしてりまりまざく。脇坂のあるを是より越て廿七八
丁行ば八日市村。農家廿五形計。茶屋もなるよりしばらくやまこて平乃(ひらの)
十丁計行て山ろを少し行て是より石英(いしすみ)村ふまる。人家十形ばかり。
こりぐく茶屋あり。是より行て福田村ふまる。山のよりあたり鮮(ひなびた)と
建(たて)り。又半里計行て蓮屋寺坂ふまる。坂の麓ふ農家十形計なり。
茶屋八あり。坂をくだりて吉田乃宿ふまる。いなさの市より二里二十八丁 山ふ萩ふ入乃

と。上成かい道よの近分なり。人家二百形許多くハ茅屋なり。茶屋
宿屋なり。出ふよ吉田川あり。是ふて渡る川向ハ肥田村ふて。茶屋三形路
傍(ぐ)ふ並立(あびたて)り。次よ小屋村。家居廿形計あり。かくて山の尾を廻りて海
ふ出ばハ小月(ちいさつき)あり。吉田より是ふ二里 人家百五十形。茶屋宿屋なり。そこハ
農家多し。吉田よりふるの道ハ平ふなく出し行て清ふ人ふ
ふる。毛利淡路守殿の居城下なり。人家三百形計。町の拡張(ひろまり)し
て。町を出て十丁計みて新田村なり。村を離ばかりあり。欄干(らんかん)
のつける反橋(そり)をなせり。わたりて十五六丁ハ。ハ長符よりふ 小月より是ふ二里
毛利甲斐守殿の居城下なり。入口よ川あり。石橋をかけり。橋を渡
りて。空丁計ハ。家中屋敷なり。町まで十丁計をなる人。種町(うゑ)

けりて、大形商家あり、殿の石垣知れる石垣なりとつたへ合せるくは、
堤下狭きやうに思はる、此城主と出羽守さく山の麓を廻りて流れよる出
て、海岸はるかの方を見れば、南の方乃海中より干珠満珠なりとつたへ
いひし宗竜を見はしつく行て前田村に至る、浦濱あり、浦若の家二三
十軒あり、此石海ハ此長門国と豊前国との間乃海門なり、筑前国の
北面の玄海灘よりつゞく山陽道の南面乃海に入る門なり、さるかよ
干満乃潮の早さこと、宇治川乃甲瀬よりも猛落激なりとぞ古人
もいへり、又渡り瀬水大河のごとく流る、海面より七八丁西ざまにて向
の山ハ豊前国なり、早鞆明神の御社目近く拝まれる、又田の浦を
又ゆきく早鞆明神を世人海布刈の神ともやしなひ海門を海

布刈の瀬戸ともいへり、古書ぞもふ穴戸とかるハ此海門のすがたなるべし、又
右此長門の方を穴戸国とかへりしも此海門よりもる名なるべしなど
或知識の著されたる書よりとりて、猶をつるべし、猶海岸をたゞ
て一里半ばかり行く段の浦ふるさふるしふるも浦若の家二十軒ばかり
浦濱より流れひくく立来べり、ひてはかりを段の浦とよ、彼早鞆神
社より、毎年十二月晦日の歌、海布刈の神事と云ひて、其歌ハ常
よりも殊より甚く汐乃干るを、彼社の神主、海ざかの石階を五百段
降りてくく、海底の海布を刈、そ同時ふけ出乃一宮の神主もかはりを
執てくおのり同くく五百段降りてお祓ひ、毋の時るゆくよりおもしよ国てく
ひ潮とみ五百段の浦ともいふ、又異しく段の浦ともいふとぞ、又半里ばかり行


豊後国
早鞆神
杜并海
布川瀬
戸之風
景



く申刻ハ下関（長府より壱里と二里）より乗りて、中の町乃茶屋茂右衛門と云ふ家に宿る。

○十八日、雨天なれども滞留して、人々と伴ひ立て遊覧す。日暮れ遂に時宜よりて、足を洗ひ、夫婦ハ已赤間ヶ関へ帰す。下ノ関ハ長府藩の出張あり、関より志づくまでハ、川あり、しかるに翼乃人々洗濯をするゆへ、町家の汚れ塵芥ハ、垢おちぬ。遊女の衣服ハ垢のく落とそ。入口を丁計の辺ハ茅屋多し。かくて西の方へ壱里ばかりハ、辺ハ大抵尾葦茂り、遠くまで向屋商屋農夫とかうべく一筋ゆえ立ハ、ぬ者ハ、ど、ふくゆ裏町もあり、海をを石垣と築て町家建ら、後の方ハ、楽山、稲荷山などいふ山あり。町乃名九ヶ所あつ。ひろぐち町、戸町、中の町、赤間町、西の橋町、あきべ町、赤田井町、入江町、西縄手町、これ等あり。抑ハ、ハ、國西國乃廻船の津みなと、日ごとに入舟出船数を知らず。誠ハ、西國第一の大湊なり。稲荷町といふ遊女町あり。遊女屋三百軒あり。みなびらり前とハ裏町といふも揚屋町ハ、中ほどれど、今ハ、ひろく広ろの遊女屋ハ、遊宴をもよふす、義ふ、をも制禁ありてあるハ、ハ、ハ、をのるされば、ハ稽古屋と称して、眉を剃り、粗服を着て出来るよふ、遊女屋の二階ハ、劇戯乃楽屋ありて、先ハ、ハ、の人形く劇戯を興ありて、ハ、遊女を役者とし、狂言をいたせ、一枚の價金四匁くらいし、近年ハ、倹約して止まりしとぞ。遊女ハ三等あり。揚代雑用せハ、拾六匁なるとぞ。十三匁なるとぞ。

義子八花群開せふ九月町家より呼時八今を歩みりとぞ遊女居住の
衣服縮ちり緬の類のごとく打ちけをさらといへどもしれの名産よく砂石を
麦ゆ多く町の西乃端ふ行時清水の戸外伊勢義の宮どのふりしかしよ
遊女町あるとく彩地と称ず遊女屋三軒揚代難用せふ八百八拾文ゆり
とぞ東の入口ちりしふまぐ八先東ふ餘まる乃ゆり弥陀ち町ふ花山
八幡とぞ西乃氏神とまる妻ちり海濱る岸のごとく南の方海ふ向ふ
御本社三社の小浪打際ふ石の鳥居ふ燈を光ふとく社前ふ至まバ
拝殿淀馬堂能舞台ぞ次ぐふ立やもちひく海
とと眺望きれバ南の方ふ豊前の山く一目ふ渡されく和布刈の神乃
御社あぐも近く眼前ふ拝せらまとく風景ふ佳ゆり是より東北の

山のごふ安徳天皇乃御旧跡と称まる聖衆山阿弥陀寺とつふ寺ゆり
西山派の浄土宗ふくち仏八七十石ゆりとつふ本堂八草ぶきふて阿
弥陀如来を安置ふ法守の宮ふ八幡宮を齋祭ゆ別殿ふ安徳天皇の
御本像を存ふ祭ゆ禊ふ八平家の一門のまこと一こふ画ゆり又一方
の禊ふ八此天皇の御誕生ゆり源平の合戦御入水とのゆ乃状を
次くふ画ゆり百文ふく御像の開帳拝礼とゆるぞ又ゆ宮殿ふ寶物
せ拝ふの物も百文ゆり寶物八安徳天皇の御太刀ふ鎗の九柄
能定殿の太刀白制ふく太刀ふ裏表ふ樋二筋ぶく書く表ふ梵
字裏ふ剣乃形を彫ゆり歴代の公方ゆり寄物ゆ一ゆ短
冊見ハゆ祭ゆれバ見ちぶ豊臣の大閤乃詠歌のごとくるハ

海の花ちるを跡をとどめて
若みどりよぬる神の那　松

淳代の論語ひめさ、平家物語古奏、毛等あり。

本堂のあと貞観石に彫る石塔の碑なり

都くハ花のとる月数ふ　天明六年當津杜中建之

と彫りしは北の人乃詞のさま高雅ふまりハなれど云葉ハ中ゆき

ぞをりさすがに一ツ二ツを擧バ御国ぶりをおぼ〳〵しけん

見ハしれる張ぶ陸長の二州まで遠のるまり　おぼゆさまをきか

ぬまに　ゆどりをくゝいる　ぬざりませぬをごいせん　物喰を

きされまま　そもそも多者まで省略つ又女性魚を前く何く後

買やうんうとよびうり仍で孫よ孫しくをうり者を見いかの平家

没落乃後小宦女達の落ぶれて世業をたりける其遺風なり

とい云侍ふとて魚の價いを安切して負るなり又けりを

乃遊女を本ハ彼宦女達ゆりおこるしなを今も女郎とふぐ〳〵

と鶏冠といひ彼ゆゑもそ川の伝説をのるふるれを

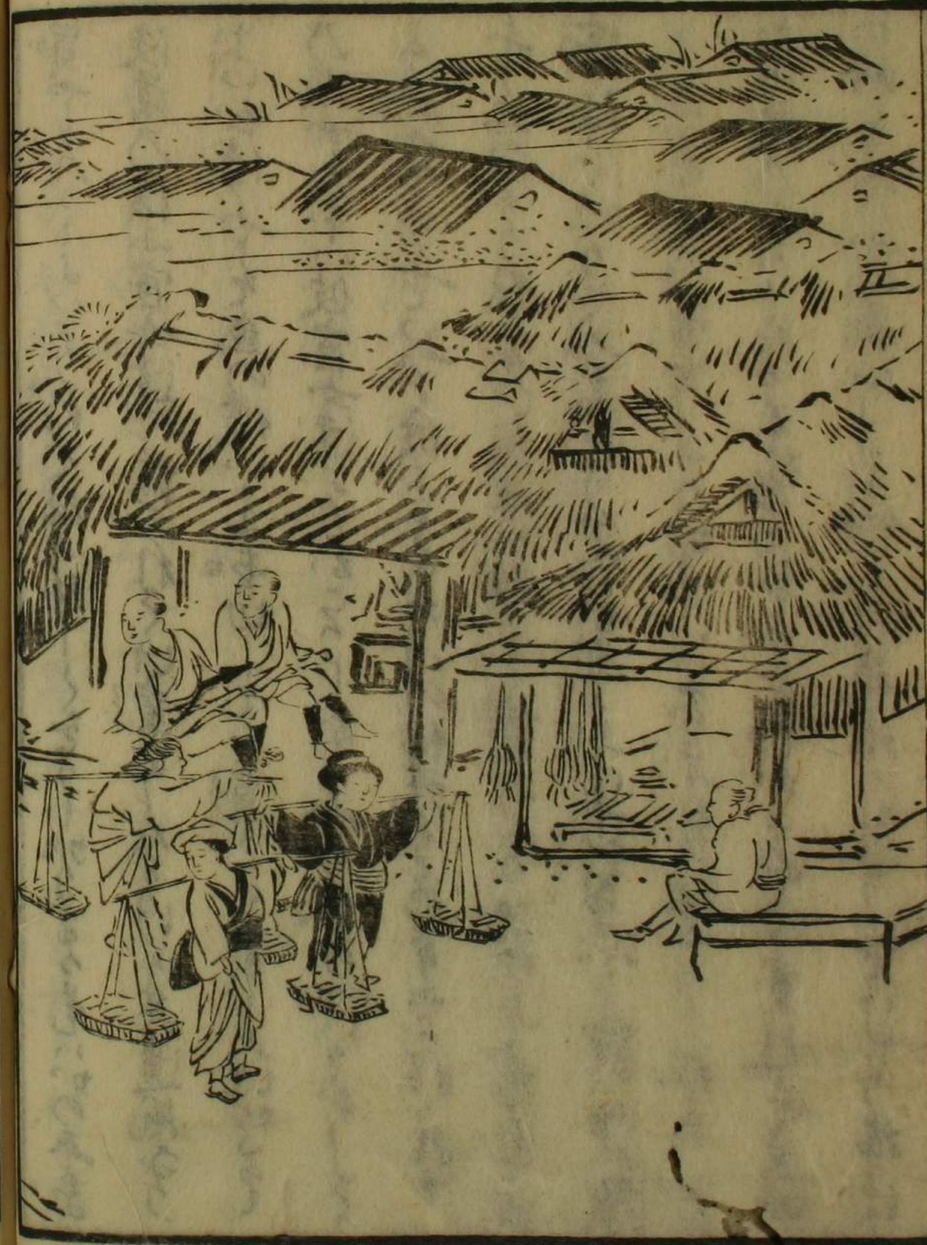
ゆゑ〳〵ひゆりぬるゆゑ徒然の録ゆ例のおりり酒のうて義ゆを呼

寄給〳〵ゆりて入来ゆり一人ハおさと年四十計るゆ〳〵紬の袷

と着黒さやの帯をうりかうぐいハ本牙着ハ似りと祇と二ツ挿

たり祇乃ゆ〳〵なる本指をちを今一人ハおきぬ三十歳計りて黒紬

の袷ゆ黒ちやの帯をうさ似りけ并祇のかんさ〳〵とりぜり指は



長門国
赤間関
此里は婦人
老多魚を
うりあるく

さびし地八名ゐまハ藝子ゐども味よ濃きてるべしと思ひしゐ
ハ相違して夫をおゐ伐持てる古女房の姿を見者ーうりとゆ
おゐるうり淋ゐしく無ゐく覚ゆ屋を出たるめく制禁の
なる恐びなれハ華やゐるゐを云ハはせげるをりけまこや元
と方より下ゐてる者のようなれハ歌三線ハ違ふゐをふくゐく
小金ゐう酒乃肴よ勝きてるとを覚して酣酔もるふをゆまゐいを
ゆるおごゐきんゐでを出まく取をゆ朝まで座上娘ゐしく無
なりて面刺ゐをりして歌半ふ云るまて飲ハしくやゐ奴藝子れ
花まゐく計歩雑用計拾もゐゐゐり
○十九日雨降ゐるかよ終滞海すゐ午刻ゐより雨やゐて空ゐく晴れ

たまゐ沙ゐしく無出さびまゐく見より無出するゐ満汐よりゐく八
ゐりゐ地よりなれハ市ふハけし湊の東乃湾より西の方伊湾と一里
ふ餘まる海濱よ繋り居る無大ふを数をちゐゐ嬢ゐし
き大湊ゐと見渡まゐふ覚ゆけふよ也府より来ゐ居ゐる在
番の京中ゐり所の長ハ大年寿と称ゐく古き家柄の町奉三郎
ゐり伊藤孝ゐく近佐甲市助中地九を嬢ゐ人ゐハ町人ゐゐゐを稽ゐ
中ふ姓格ゐでゐゐくふの〳〵地方ゐ石ゐく知ゐせり此よまゐ遠
なる富家ふハ油七 網三 縄七ゐでゐふゐゐり又此地区のふよ素麺
と名物とゐるゐでゐゐのふ国のこせるゐ中ゐり屋つ方前宵藝子
のきぬゐるゐ四ゐ作ゐる娘の子を伴連く彼来る乳房ふくめく

抱きなぐらしたゞ行語ひとく海ゝぬかゝる藝子こそ孫　者迚さて
大坂と出船せしりけ和よあるまくふ源平戦場の古跡とゝるて
数ケ所あるが中よりけ赤間関の湊ハ平家没落の所なれバ海面を見
渡もふと底のみくぢと沈と浴ゆ　出道くゝ乃ちつゝ浴ちんやけん
ちこめ浴ちこの四今この時はいふゝ悲くくもおりめつらんそぐ
おりわゆるまくよゞんもちつぬ遠さむくの事乃今月のおよんる
めくおりひなされてくきくろふ哉　さこちせくろかくてのみもある
べくらぬハ塩谷と例の海のとかくゝ戒剣ぞくよふゝぬ。

筑紫紀行巻三終